「なまけもの」

―２稿―

2023/6/21

雨森 れに

〈人物表〉

富田　和也　（３８）　無職。元消防隊員。
富田　三奈　（３４）　和也の妻。保育士。

母親　上階に住むシングルマザー
みゆ　上階に住む女の子

消防士　和也の後輩

〈ログライン〉

無職になってから動かず風呂にも入らない和也が、上階の火災で動いて子供を救助し、その時の汚れを妻の三奈に指摘され風呂に入ることになる。

〈作者の狙い〉

・和也がどれだけ怠けているか
・何かを馬鹿にするときは我が身を振り返ること

1. マンション・入口（昼）

一般的なマンション。エレベーターを待つ母親と女の子。母親はケーキの箱を持っている。

みゆ　「私エビフライから食べたい！」

母親　「はいはい。お友達が揃ってからね」

2. 富田家・リビング（昼）

マンションの一室。壁には消防庁の特別功労章の表彰状が飾られている。テレビの前に3人がけの白いソファーとテーブル。ソファーには数日風呂に入っていない状態の富田和也（３８）が横になっている。スマホに夢中になっている和也に富田三奈（３４）が声をかける。

掃除機をソファーの脚にぶつけながら、

三奈　「ちょっと。そこどいて」

和也　「うん」

和也、返事をするが動かない。

三奈　「聞いてる？　もう2ヶ月ぐらい、このあたりやれてないんだけど」

和也、三奈の顔を見てため息。ゆっくり起き上がろうとして、やめる。

和也　「だめだぁ。今日は動けないわ。あ、三奈、リモコン取って」

三奈、掃除機を止め、リモコンを差し出す。

和也　「さんきゅ（受け取ろうとする）」

三奈はリモコンをひっこめ渡さない。

三奈　「で、いつどいてくれるの？」

和也　「えーっと、昨日の録画観たらかなぁ」

三奈　「それがいつ終わるって？」

和也　「金ローだからすぐだよ。あ、そのまま再生してくれない？　録画の一番上のやつ押してくれればいいから」

三奈　「金ローって、2時間ぐらいあるじゃん」

和也　「そうだ。その間さ、三奈、お風呂でも入ってきな

よ。リラックスタイムってやつ」
　三奈、リモコンを床に叩きつける。
和也「なにすんの。壊れちゃうじゃん」
三奈「お前が風呂に入れ！」
和也「だーかーらー、もー、聞いてた？　観たら動くって。お風呂もその時ね」
　三奈、大きくため息をつく。
三奈「じゃあ待ってる間に洗濯する。ほら、パジャマ替えて」
和也「えっ。汚れてないし、まだいけるよ」
　三奈、和也のパジャマのシミを指差しながら、
三奈「ケチャップでしょ、ソースでしょ、これは油？　ほら、なんか加齢臭もするし」
　和也、シミを認識して目を見開く。
三奈「着替えたら観ていいから」
和也「じゃ、じゃあ……」
　和也、上体をあげる。
三奈「うん。着替え出してくるね」
　三奈、にこりと笑い、着替えを取りに行こうとする。
和也「待って待って。違うって。自分でやるから、それかして」
　和也、リモコンを指差す。
　三奈、大声で、
三奈「そうじゃないでしょ」
和也「自分でやってほしいからハードルあげたんだろ。ぐうたらな俺だって察するチカラ、あるから」
三奈「待ってる間に洗濯するから協力してってことでしょーーー」
和也「あー、2時間待ちたくないってことね。いいよ。じゃあ『ダーウィンが来た！』にする。それなら30分だし」
三奈「……だめだ、こりゃ。お手上げです」
　三奈、リモコンを渡す。
和也「よっしゃ。今回はナマケモノなんだって」

三奈、画面を見て嫌そうに顔を歪める。

三奈　「うわ。カビみたいな色してるね」

和也　「へぇ、苔だってよ。全然動かないと動物にも苔はえるんだ。なんか動物としてダメだなぁ」

三奈、和也の全身を確認するように見る。

マンションの火災報知器が鳴る。

和也、飛び起きる。ベランダに出て、外の様子を伺う。

上階の窓から黒い煙が出ている。

和也は確認できたというように頷き、急いで室内に戻る。

和也　「3階上だった。三奈は119番通報して。俺は行ってくる」

三奈、無言で数回頷く。

和也はパジャマのまま飛び出す。

3.

マンション・廊下（昼）

煙が立ち込めている。

和也　「誰かいますかー！」

煙を吸わないように前傾姿勢を取った和也が廊下を歩く。

母親　「助けてください！　子供が！」

煙の奥から母親と4人の女の子達が走ってくる。

和也、駆け寄って、

和也　「どの部屋ですか」

母親　「一番奥です。うちの子だけベランダにいってしまって、ああどうしよう」

和也　「僕が行きます。助けます。お母さんは子供たちを外まで連れて行ってください」

母親　「で、でも」

和也　「任せてください。僕は消防士です。みんな、お母さんについていくんだよ」

和也は子供たちに話しかけ、ひとりの背を押す。

母親は押された子供の手を取り、その場を離れる。

和也、廊下の消火器に気付く。

4.

マンション・出火元の部屋（昼）

部屋の中央、ローテーブルの上から火柱。カーテンやファブリックに引火し、ベランダまでの道がない。開け放たれているベランダで女の子が泣いている。

和也「もう大丈夫！　今オジサンが行くからね！」

和也、消火器をまき散らしながら突撃するように走る。

みゆ「おかぁさぁぁん、おかあさぁぁぁん」

和也、女の子までたどり着き、抱きしめる。

和也「よし、よく頑張った。すぐお母さんのところに行けるよ。だけど、ちょっと待てるかな」

女の子、頷く。

和也は日に向き直り、ローテーブル上に向けて消火器を噴射。火柱が徐々に小さくなる。

和也「このぐらいなら……」

和也は女の子を覆うように抱きかかえ、部屋を脱出する。

5.

マンション・入口（昼）

消防車が止まっている。

和也が女の子を抱えた状態で現れる。

避難した住人たちを掻き分けて母親が駆け寄る。

母親「あぁぁぁ、みゆ、みゆ」

みゆ「おかあさん！」

みゆ、走って母親に抱き着く。

和也、親子の抱擁を見て微笑む。

6.

富田家・リビング（夕）

三奈とススで汚れたままの和也、ふたりで部屋に戻ってくる。

三奈「誕生会で串揚げやってたらって、なんか誕生会がトラウマになりそうだよね」

和也「火事自体トラウマになる可能性高いからなぁ」
三奈「わかる。私もうちまで燃えたらって考えて怖くなっちゃった」
和也「火は上にいくから、下の階までってなかなかないよ。さてと」
　和也がソファーへ勢いをつけて寝そべる。
三奈「ちょ、ちょっと」
和也「止めないでよ。沢山動いて疲れてるんだから。動きたくないの」
三奈「さっき見てたナマケモノみたい……」
和也「失礼な。ナマケモノじゃあんな救助は出来ないって」
三奈「私それ見てないし。大体消防士やめて2か月経ってるんだよ？　なのにいつまでもぐうたらと」
和也「何度も言ってるじゃん。俺はぐうたらするために人生の夏休み取ったんだって」
三奈「せっかく表彰されたりしてたのに」
　和也は返事をせずに、三奈に背を向けるように寝返りを打つ。
　ソファーが汚れ、三奈が眉をひそめる。
三奈「とりあえずお風呂いってきて。さすがにそれは汚れてるでしょ」
　和也、自分の体を見る。
和也「うぇ。ひどいな。でも意外とまだいけたりして……」
三奈「……汚れを気にしない人間も、ヒトとしてダメだと思わない？　それともやっぱりナマケモノ？」
　和也、様子を伺うような上目遣いで三奈を見る。
　三奈が笑顔で、風呂場の方向を手で示す。
三奈「どうぞ人間にお戻りください」

終わり